

ワシントン州

グレッグ・クセラ ギャラリーと
スヤマ スペースでの角永和夫の展覧会

スヤマ スペースは、他のギャラリーと協力して、大規模な展覧会を町に持ち込むことがよくあります。今月は、グレッグ・クセラ ギャラリーとのパートナーシップが特に有利です。角永和夫の作品を2か所で見ると、さらに洞察が深まります。正式でプロセスがロードされているので、反省すると報われるのは仕事です。

クセラギャラリーでは、角永の5つの特大ガラス作品のすべての先端に1つの光が集中していました。わずかに緑色のガラスの山はそれぞれ約1,500ポンドの重さがあり、アーティストは溶融ガラスを炉から下の冷却室にゆっくりと流し込みました。得られた作品は、単なるコーヒーテーブルの装飾として長い間ガラスが溢れている都市に必要な解毒剤として機能する方法で静かに美しいです。インストールはシンプルで劇的に照らされています。アーティストと彼の素材、そして素材と物理法則の間の反復的なコラボレーションであったもののほぼ劇的なプレゼンテーション。

グレッグ・クセラは、1960年代の日本のもの派（オブジェクトグループ）を角永への影響として特定しています。その特定のブランドのプロセス指向のコンセプチュアルアートに慣れていない人は、リチャードセラの溶けた鉛の破片が床に投げつけられたことや、バリエルヴァの同じ時代のカットフェルトのコレクションを思い出すかもしれません。SerraやLeVaの初期の作品のように、角永の作品は欺瞞的です。得られた作品は、美しくスペアなだけではありません。60年代から70年代のフォーマルアーティストが、作品を表すためによく使われる「ミニマリスト」という言葉を避けたことがよく知られています。角永の作品を見ると、角永が彼らのように芸術を作る理由は明らかです。アーティストの手と素材の間の仲介。結果として得られる断片は、人間の行動と自然の力との相互作用

用の証拠です。

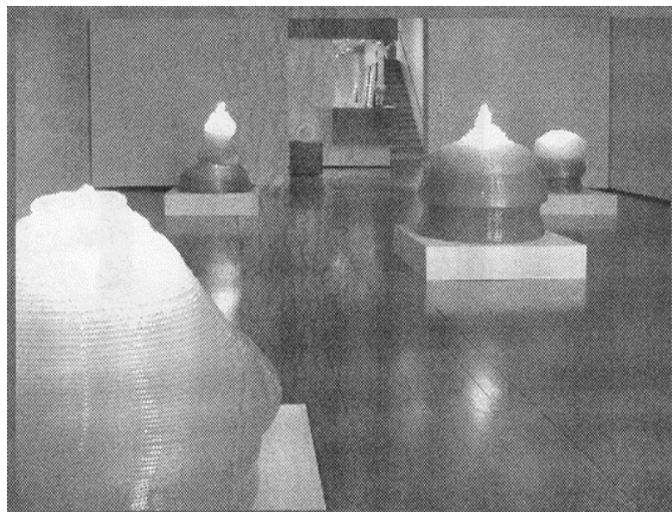
スヤマ スペースは、その大きさや展示されている素材やオブジェの多様性から、これを最もはっきりと示しています。入るとすぐに、高さ約15フィートの51本の暗い竹の棒に直面します。左側には、長さ約9フィート、高さ2フィートを超える紙のパッドがあります。部屋全体に、16-1/2フィートもの長さの大きなエレガントな丸太があります。このスペースの大きな丸太（クセラギャラリーの後ろの部分にある3つの小さな丸太のような）は、さまざまな方法でスライスされます。ピースは再積み重ねられるか、部分的にカットされ、空気と熱にさらされることで、自然はその痕跡を残すことができます。大きな紙片は地質学的な起伏を思い起こさせ、その表面の半分は緩やかな曲線を描いています。

アーティストが少し湿った手漉き紙を注意深く積み重ね、半分を1つずつ丁寧に分離することでこれを作ったことを発見することは有益ですが、必ずしも必要ではありません。角永の白、茶色、灰色のキュレーションされた形を見るだけで十分です。ここにある各オブジェクトは私たちの自然界の一部であり、人間との接触によって簡略化されていることを知っていれば十分です。この種のプロセス指向のアプローチがアーティストのエゴ、個性、または心理学の外観を減少させる方法には、やりがいのある皮肉があります。角永の作品は自然を称え、静かに人間の行動をその中に置きます。

文・Frances DeVuono

Frances DeVuono は、アート ウィークの寄稿編集者です。

角永和夫：2月1日、シアトルのグレッグ クセラギャラリーでガラス彫刻が閉店しました。ピュアフォーム：角永和夫によるインスタレーションは、4月11日、シアトルの2324 Second Ave. のスヤマ スペースで終了します。



(上) スヤマスペース。(写真：エドゥアルド・カルデロン)
(下) グレッグ・クセラ ギャラリーでのガラス彫刻
インスタレーションビュー